

主張 主体的な学習の姿勢

山崎昌甫

『主体的な学習の姿勢』『生活教育』第16巻第12号 1964年11月 p.7

教材の現代化ということと主体的な学習姿勢の確立ということは、教育活動の二つの側面である。教材は科学技術、芸術などの発達に応じて、つねに再構成を迫まられている。科学、技術、芸術などの発達は、それぞれの領域での専門家たちの主体的な努力によって支えられる。それらの成果の獲得は、学習者が、それに主体的に取組んだときはじめに可能なのである。しかし、主体的な学習姿勢なるものは、教材を提示するように客観的に教授することはできない。主体的ということとは、認識や行為の個別的実践的ありようをいう。学習者が科学、技術、芸術などの成果を個別性、実践性において、また実体性、身体性においてとらえるには、それらをそれぞれの領域に独自の、そして客観的な存在である認識、技能ないし技術として獲得することなしにありえない。知識や技術が独自のものであり、客観的なものであればあるほど、その習得には主体的な学習姿勢の確立が必要なのである。

ところで、技術革新時代の生産技術は、単に技術の法則性だけに規定されて存在するものではない。それは全体として企業や組織として統轄される機械、装置編成と労働力組織の中ではじめて現実性をもつ。現代の労働による自己疎外からの解放は、したがって、技術の法則性の理解と体得だけでは不十分である。労働者としての自覚、つまり主体的な労働者の形成は、労働者階級の連帯意識と社会主義社会への展望、そしてそれに与えられた労働運動の実践を通してはじめて可能なのである。それゆえ技術の主体的な学習姿勢の形成は、技能ないし技術そのもの、技術の歴史、技術学、資本主義社会と資本主義組織の科学、労働および労働運動の歴史と理論などの知識が、学習者の興味と学習要求に支えられて統一的に提起されたとき、それへの一つの方向づけがおこなわれる。ただ方向づけられるに過ぎない。なぜなら、技術は抽象的なものでなく、歴史的社会的実体なのであるから、歴史的社会的実践者としてそれを受けとめるのでなければ、技術の主体的な学習にはならないからである。しかし、児童、生徒などの学習者としては、あるいは、それらを統一的に把握したとき主体的な学習姿勢が形づくられつつあるといえるのかも知れない。にもかかわらず、生産技術の学習という点では、真に「主体的な態度」とはいえないであろう。やはりそれは、それへの一段階である。

近代学習指導理論の原則である、自発性、自己活動、経験、興味などは、主知主義的な注入に対立する方法概念なのであって、知識、技術の教育的価値自体の否定ではない。「自発性」にかえるに「主体的な学習姿勢」という概念をもってすることは、ただ言葉だけの違い以上のものがなければならぬ。それを現代学校の教育実践のなかで明らかにしなければならぬ。